

和訓栞

加之部

六上

津田文庫
文庫 1
1604
6



早稲田大学
図書館蔵書

倭訓彙前編六

つた文庫

洞津 谷川士清纂

加の部上

加 日改よむハ二日三日れ類也日本紀古今集よつくり此日と云ハ加さぬ辭也
 うハ略加かるといふ詞也かをがと春日と云と亦同 ○歟乎夫耶共諸を
 ととらむハ疑辭也論語ハ耶字か一史記ハ未審之辭と注せり ○君々
 代富士う根かとのうハ濁りてより之字の意辭の助け也口語よてハのと
 つへき代がとハたれとよりこころふと可くハこころくよりウ活拾遺
 小も可くくがとよりたるともらうらそたれなるもと裁たり ○可にかかると
 畧してかとのとよりも多し又冀字をかかるとよむと畧してかとれとより可
 何り濁りてよりむへさよや又休め字は畧さるかも何り ○萬葉集ハ彼とよりか
 此略也 ○香とよむハ音の從とて訓とかまほなへし萬葉集ハ芳もより
 日本紀ハ多くと氣とよりけの轉せ侍と訓れなるへし ○歟とよむハ嗚
 声かると又啞の義也とより元禄甲申三月十五日江戸上野中堂より煙

倭訓彙 卷之六 上

010190595523

出さうとかく〜とこれハ火とありハ蚊のりり泣く後草れ塔も又かくの
如しやふハ豹脚也蚊のたむと称するハ米蛆の化さる事也と云々○鹿とよ
むハ去ルれ略也○弱き代加よハ細きと云々をれと云々類のハ河れ上の
助也と萬葉集按よてたり催馬樂よ加より河ハ源氏よ加れる姿とい
ふも同一○期ハ加さハ略也

△加あ 鳥の鳴声と云々國語ハ啞と云々たり袖中披よハ加こくと唱とい
ハ枕草紙よハ加くとかくと云々續詞花集よ

加あを 萬葉集よみゆハ幾語書と云々加あさふと云々如し
△加い 倭名欽よ棹と云々擢楫も同一韻會よ前推曰棹後曳曰擢
曰擢横曰棹とみたり前推ハおろ也後曳ハかへ也縦よ押ハ擢也横よ押
もお加へ也凡て加ハハ川江よ用わく海中に用わくれをお加ハハ河海江湖用わ
られさるるさふと云々夫木集にお加と云々あり舟に加ハの志けくおとあ
是也かさと通す釋名よ擢水曰擢と云々也と云々倭名欽よハ楫と云々



萬葉集よ榜と云々又真槌繁貫と未加伊之自奴伎と云々たれハ槌も加い
と云々ハ繁貫ハ辞もよく加あたり畢竟ろ加いハ成から四名一物引ハ大小長
短の品よりて文字ハ差別ありと云々○萬葉集よ奥津加伊邊津加伊
えよりたれら船の楫江と云々楫也○俗語の加いハまはるぬと云々も船よ
了也云々○倭名欽よ枕虫と云々枕の音と記す也新撰字鏡よ刺と云々和
字よ○肥前よハ桶と加いと云々手桶と云々古き書よ水加いと云々
たりとも云々○俗よちよと云々成加いと云々擢より轉ハたり詞かまハ擢
ハ打と云々同一はけくハ詞也加さありふ加さ捨るかさ消をかとの如し
加いふ 源氏よみゆ織物と云々ハ海部の衣也と云々大波よみる貝と
織方也園文曆よ海部藤僧と云々たり魚介ハ總名と云々也
かいら 日本紀よ典鑑と云々常よ鎰取と云々常會の時よハ役たり諸
司此下にあは卑賤の者也伊勢神宮と云々○伊勢飯野郡山添村一志郡神
原村伊賀伊賀郡高瀬村と云々に鑰取明神乃号たり山添ハ世記に飯野
高官に四年奉齋と云々是也○受領も鎰取書生と云々

かいまみ 日本紀に視私屏と訓す垣間見と真名伊勢物語にゆ枕草紙に加
いぢみくともみたり大和物語にかいまいとつゆもこれ友めさむの成
かゝかね 倭名抄に脚とあり肩に懸金とつよや俗にかりぬやねとつ
かゝまろ 日本紀に帳とあり垣代の我也源氏に記たる青海波の舞に垣代四
十人有り奇垣の意かま

かゝく 埃囊抄に物の分派とつよかゝく爰程とつよ外都の轉訛也とつ
かゝえき 戸籍と改易も也賊盜律に移郷より出とつよ改易の字續日
本後紀も也他のつよ用わり刑律の名とありハ後世れり也

かゝとも 日中行事に夜のたかかゝともみたり燈燃乃我燈とつ
よく燈燈と音おもあり徒然草にかゝともとつよとつよとつよとつよ
かゝもつ 日本紀に攘字とあり今もかゝともとつよとつよ

かゝもらひ 著聞集徒然草にみゆ燈練の餅也今も東國にハ名遺まり字書に
饅と飯餅也と注あり○一緋紳の戲證に牡丹餅ハ春れ名也夜船ハ夏の名也菰
ハ秋の名也北窓ハ冬れ名也夜船ハ著とあり北窓ハ月入りとて賤者ハ辨不知とつ

かゝまらう 戒名とあり今七者ハ必そ僧の法をりてハされと佛經よりと
なり異邦もととねりて高泉れ持来り母の神主ハ長金孺人神主と題
せりと○日本此俗ハ祖先より此姓名を数代其まに呼と風俗とハよく給
らハり故に戒名とあり分てる成へ

かゝはくを 神代に訣職原抄かゝに任雅意とあり埃囊抄に雅ハ素也
とつり雅意れ字ハ蕭望之傳に出り俗にかゝはくを係かゝとつるふか
我意ととと通せり

かゝもとの何る 源氏にみゆ垣下れ饗の我垣下といふハ後撰集に文院
れみと記の垣下ハ殿上の人くまかりととつ賀茂ハ幡の臨時れ祭又賄
の如り何れも小とあり也といり○相伴と垣下と称するもハ我也弄死抄
不人數の并れ人の交りと垣下れ君達といふ也とつるなり

△かゝるべ 日本紀倭名被に首とあり上方の我かゝる一説に髪邊と
かゝるで 顯昭説に細引ハかゝるておもととありたの大綱とよと
右此手綱とよといふといり○紙手とよたりハ俗に快さといふ類なり

かうでんしふんをとり

かうど 柑子也續日本紀よ柑子と云たり性靈集よ大柑子小柑子有り大柑子ハ今の蜜柑也三代實録よ大宰府の例貢と有り○春盤工用りは好事の音と有り○好事不出門惡事傳千里此語ハ事文類聚より○後撰集に父母有りなる人のむせりよ志のいそかういほり代さつけさかうせり是有りなることと云るハ勸事此音も拾遺集よかんどうと云たり

かうま 行李此音也旅持りりのと行李と云る西土の書よ云たり俗よこそと云り

かうい 源氏よみゆ仁明天皇此時より始りたり漢書よ更衣と有り師古注よ爲休息易衣之處亦置官人と云たり隋書の兼衣も同

かうり 郷司と有り庄司の如し熱田社田嶋家よ文明親王郷司職賜りたり御教書有り郷司ハ大庄屋の類也○今郷士此稱あり郷ざむいとも云かりあり 冠と云る僕頭と云りかりありと云も又通を蒙るりのかまハ名目よふ也今讀書よかんやると云い常の口語よりありと有り頭中も云り○

冠社冠と云る今昔物語よみたり神社の位階と進めらるる成神冠と云るとらふるよふ也續紀よ奉錦冠千八幡宮と云る類也○代邦のよ代り冠を推古紀よ始行冠位と云るを始めたり北史よ北史小毛頭赤燕冠但垂髮於兩耳上至階其王始制冠と云たりと云事記よ諸事此より於投票御冠成神と云る出雲風土記小も大神之御冠と云りハ首飾の玉といふ小やと云り○應神天皇玉冠のゆハ故事談よ見也○厚額薄額半額透額亦此別あり額ざハと磯といひ様よ両方へ出さる細がねと角といふと有り○日本紀に爵も云り始く五位よふる浅叙爵といふ榮爵を買と云今昔物語よみたり日本後紀よ禁新民蓄錢貨以求爵位と云る命○からかりふりハ褐冠也官奴と云る也○冠の城ハ備中にありかり山石見邑智郡と有り

かりがい 髮搔の義也倭名波よ擦鬢取かみり此とみてかりぐハ其音便也本草よ搔頭尖と云みたり○刀よ副かりかみも同物かみり寢覺記よ守刀よりかりかみ抜き鬢はくろいといふなり古ハ髮を掃りてかりかみいこくるなり兜蓋かと云る時ハ髮と乱し其かりかみと太刀に云ふ也と云

かろハハ 馨とよかりかろハハ此轉語也とつり全浙兵制の香とかんらと譯せり○俗よハ香箸の義も有り

かろぬー 神功紀に皇后親為神主とみゆ是始也日本後紀に神祇伯者是天照大神神主とてなり西域記に宜哉神主珍滅靈廟於是殺神主除神像投縛芻河とつりの此邦に稱する所の者と同一今諸社の祠官の通稱なり○儒家よハ此の神主ハ神体の稱といふこれと上古ハ神此社ありて嫡家其祭祀を奉り支庶相扶けり崇め祭より今家と祖考此神靈と祀るよまきり是も祠堂の制ハ儒家乃法也位牌ハ儒の本まきり也我邦の古式相傳ふる旨なり其人よまきり我求むー

かろい 柑類也とつり源氏物語にかりーやう此物といふ是也西土ハ柑果れ語なり

かろてん 香典也典ハれまの係とよむ此代にまらる也香奠と云ハ非をそかりせん 清尊録に富人以錢妻人取其子半曰行錢とるなり○香煎ハ茶に久く用る所あり

かろん 告文とあり其旨報を文よ遊ハされく神祇よ告せらるよ後醍醐帝の東上此憤を休めさせられたり御告文と下されり神文といふ如し

かろぶつ 漢書に得美食好物とみたり○大將ありんかろぶつといハ肴物の音也

かろづけ 上野とよ上津毛野の畧也

かろのとの 四等れ長官とよくかるといふとれと音便とくかるとよるとのハ數也源氏にかりけさみといふも意司ー

かろむさみ 髮缺とあり今俗かむさみといふ也

かろぢやう 定考とよくかろぢやうと唱へるよ故實にハ六位已上の加階よいふるよ少く撰叙令にり二月十一日ハ諸司の輩藝能にと撰むよ派定考と一武部兵部の兩省諸司に定日撰成を各と列見と一とよ去集めく奏する儀擬階の奏といふ

かろかりの 棠陰比事に交割常住物とせたり寺僧の付物といふる明律よみたるハ引るよ以意也といふ

かろへとわぐを 旋頭歌と赤人家集躬恒集よかくよかり濱成式よな

かづらひはゆきやうかふ雨点なり八雲御披は普通の哥八五句是八六句也初五七五八かへくれ等の句はよく其後七字の句或ハ五字れ句と云ふをとりとみたり六句の句と云ふは是也萬葉集數百首八皆五七七と上句と五七七と下句といふそと八頭と云ふをとりとみたり古今集以下此旋頭を右の句法よむ一此と後人句法と謬なりと云ふ

△かたは 日本紀と薰とよみ萬葉集少とかくちり新撰字鏡に芬とよむ所も同一又淑郁もちり香居れ我も或ハ芬芬或ハ淑郁もよむ△かたは 卑俗と母とふかとも韻通を通監胡注に齋諸王皆呼嫡母為家とともみゆ○田舎と妻とてかたつり兒と据くつ也西土は母と媽とつり郷語に妻とて媽とつりに同一○衆妓集に出雲國仁保乃浦ちりかたつり所漢人此家とゆりく

あられもつちちのむらじかかのおりやとあれさへんかどのけんとく海中に小山はうくく若窟の中は真水と云ふ是と乳水とつり又大社乃神れ乳石ともつりけ所れ小石とつりくも附着り

或ハ大石或ハ木又ハ船かとも附とて是鐘乳石のつら堅まらるゆかへ

かぢ 照くく好事とつり赫字れ也出雲風土記に光加賀明也とみり○日本紀に利字とちり今も足利かとい訓と用たり文選に羸とよむ所も同一○詞花集に加賀國とよむとびとちりちとよむと山と肩のゆれゆいへ前うちゆいれはるふかれハ風土記のそか多也

かぢみ 鏡とつれ赫見の義也又影見也又神と義通を鏡ハ神明の伴也古鏡皆柄ありゆく裡面は鼻紐ありまはをけは鏡りといひゆくみれ緒を附りとりみたり又鏡枕といふ拙もつり○信長公鏡背天下第一の字と禁せりゆき○紅毛乃硝子鏡ハさびどとと○五月五日は鏡とちりハ百練鏡の故事也よく鏡とゆりちとつり○日本紀に白歎と訓に古史記に薤薤と訓せり倭名鏡に白歎やゆかこみとみたりと真の白歎ハ享保中ハ漢種と得りつりつり又鏡に白前のかぢみとてたり○俗に薤薤とかぢらひともかぢつともつり後拾遺集に人乃尊合せしけり新加ぢみとありとありせりかぢみもかぢみ

ゆゑに証かけの傳言をせしむるもみせしむるなり

其に蔓草よく相似る浅い也○波と針線色といふは其實の名也つら
とつふ又まらんやとつふとそ○葉と陰乾をうると焼くよく糞臭と避る
是とかくく名つく近江世の勅名也とつら○俗にちまるとつら葉
に白汁ゆりく乳は似たり食ふく乳汁を補つるとんがうれつともつら
○一種年と種く枯る抽けり紫厚く色赤し○人と鏡とをうら墨子
君子不鏡於水而鏡于人とつら○かみ具けり○鏡面草とかみま
らとつら又藏玉集に正月一日大肉をく餅の上へ置く根とつら
俊頼の莫傳抄もみたらふ又吹とつら故事藏玉集にみゆ又權
らとつら墨俊奇けり又浮草とつらと○鏡神八肥前松浦にけり
鏡宮八伊勢にけり古記に朝熊水神とみたら是也○かみの郡は美濃
也各務とけり鏡山に近江也又山城小陵山の東も豊前もけり鏡池は
近江にけり大和國鏡作神社にけりともけり堀川百首にえぬ○姓に
鏡久綱けり佐々木の支別はけり近江にけり出るはけり

かむむ 屈とふかむゆともいふゆの及む也○かむまらふともつら雉のけむ

かとは是也屈の我也蟄ともあり○鼈手此鼈もかむゆ我也よく萬葉集
にかむ我手とつら

かむ七 萬葉集に八かむふとつら新撰字鏡に際とやゆもかむとつら顯

昭云世俗にさうくをハ法をさかハむらんとつらかハハ縮布の破
く何よをさくもさかむゆ也とつらハけりつらよとつらとけりハ法は
也かハさうくとつら又足かとけり抽よふまきつらよハとめさんぐれとつら繩の
やうにかひく火とつら其疵をあてむるさかハ火とつら也○俗に針はれ
るよとかむとも是也○類聚雜要に搔敷ハかハの上ハゆゆハ敷とつら
かむ 懸字とよありかむれ及く也○波のかむとつら漢字は懸字乃
義に轉したる也懸七同○神のかむハ日本紀に託字とつら又著字とつら
やうはくとつらとつら同○源氏にやうとつらなとつらとつらみかつハとつら
波とつらゆゆもかむとつら定家卿けり

箱枯のまれとつら乃淋とつら七度とつらかむゆ春の山里

○俗に抱ゆふおかほとすも着のそぬ一からぬ時なりとすハ船と考
くつり古今集よ

おのひと七程うとまれぬ春霞からぬ山乃何れとけりハ

○若とよむハかくつり也くあ及加也日本紀よ如斯とよみ或斯の一字ともよむ
かくて 家のかくつりつり加と及き垣とま同○蹴鞠の場とよむ義同
一新古今集よ最勝寺の様ハありれかくつりとて源氏とよむつりかくつり
えつり一本懸ハ天智天皇此故事とて是かくつり始ぬ一三本懸五本懸
六本懸とともつりとも四本懸ととも良上格雲に柳坤上楓乾上松也
とつり難波家上ハ四本とともとつり此松と垣る榎田彦大神れり小据
とつり水無瀬も同○古今集よとす是ハかくつりハかくつりの約言也

かくつり 人とかくえはハ抱とよむ介抱乃と也腰とかくえはハ捧腹とて
たり○枕草紙よ及れり此香乃つりかくえたり又あせのうかくえつり
えたり○何れ河と海とにかくえとすハ上より河とつり地とつり
下より河とつり

かひ

萬葉集よ耀歌とよむ或ハ耀合に作り又加賀布耀歌とてたりかけ
つふれ我けあ及加也字文選よ出たり玉篇よ耀往来也とて中仙覚抄よ及り
東北諸國の男女春花開時秋葉黄む節飲食と相なるとて遊ひ樂む
とつり常陸風土記よ筑波山乃祭日に男女集會し和歌と贈答し嬉とな
は是と耀歌とす朴素此風俗なりとつり何垣と同事をみり括津國風土
記よえたり

か

傳燈録よ案山子也とつり鹿よかかつり山田のそつりとも是
也○信濃とつり節分の夜つりともあがつりともつり夜つりとも
是也埃囊抄よハ炎串と名くとつりともつりともつりハ魘魅の畏るとつり
ともつり

かやく

日本紀よ光又暉煌とよむやくハ煥の義也古事記よ炎耀靈異
記よ炫とよむ○かやくの宮ハ一条院の時上東門院乃藤壺とよむゆを
とかくかせつり業花物語よみたり源氏とよむハ尚代とてくはつり
○倭名抄よ眩とかくやくとよむかそれ及く也

かみし 日本紀竟宴の可に之の鏡葉は茂也と云たまのそれかみ葉と云
はるれ八神代卷若密章の故事より云ふなり

かきしび 篝火と相よるたり篝と懸く史と燒とふ史記に夜篝火と云り

○京北篝と云る八東鑑に爲洛中警衛出辻に懸篝之由被定と云る篝松篝
兵篝屋と云るものつゝと漁倉の代より更起りて四十八箇所の篝ふと云
記よりて篝の雜色と云る室町殿五節句次第より云たりと云る衛士の預
めりて○軍陣に捨篝本篝と云るなり

かかき 倭名抄に嚇と云る萬葉集に筑波村にかかきと云る文選に寒

鷓鴣雛と云るたり世に好むく貧と稱する者とかかきと云るは也なり
在子に鷓鴣得腐鼠仰鷓雛曰嚇と云る韻會に以口距人謂之嚇と云る○高
橋氏此文よみさごの声と其の鳴かかきと云るなり

かかき 掲と云るなり昇上子也きあの及り也褰と云るなり衣よつふ也新撰
字鏡にハ初とかげと云み樞とかかと云るなりげる及く也簾にハ捲燈にハ挑
みりて

かかき 新撰字鏡に營と云る博雅に假警謂之營と云るにハ營乃

誤字ありてハと云と通れかかきと云るにハ倍々なり

かかき 中臣後よみゆ式に哥の一字よ作是と伊勢中下部に可と二字

よ作り朝野群載に客に吞よ作れハ水と吞の声今俗にかくくのむと云
是也と云り又かのむ條よみゆ一説に利の義と云

かかき 赫と映に義ありてかやれと目よ受る味也と云る

かかき 文選に鞅堂と云る竹取物語につひかづらひく條に
音ありてかかきと云るひ又ありてこれにかかきと云るみたりかかきと云る
義ありて

かかき 古事記日本紀の可に云たり屈垂くの義指を屈やく教と云る
萬葉集に鳥敷而と云るかかきと云るなり一説に考と云るはと云る
古語也と云るなり

かかき 日本紀に連又坐とかかきと云る連坐と云る也○縁坐ハ唐律に

かかき 牆垣と云る限ふれ義也新撰字鏡に牆と云るなり日本紀

の何よかろくはらみくはらう韓垣組垣也○日本紀より氏より藩離乃我か
一節曲とともあり○俗儀より中八加とせよと八省心雜言に隣里欲高
搖親情欲遠方と女たり○折八實れ赤さう名と得方とや○葉も又紅葉
を伊勢家集に折のお葉に飲たなんあたり多とて了爾雅翼に折落葉肥
人可以臨書とみたり花鏡に此と自然箋とつう○折樹に鳥の巢なり西
陽雜俎七絶乃二也○鷹と樹とよめる何の三首も

カみちを俗押れりとさるふ水とくもふれおにわかん
取押の折なりとに葉のち乃萩よとくや田字とほくらん

○牡蠣とつふ石より着たるをかきとれとく取りのかまは名付るなる一延喜式
に蠣破蠣とみたり蠣とくうつふ八今れ沖蠣也本草に海牡蠣とみたり
種は南産志より黄蠣は是とれかかきとつふ一處よりく動かたり
皆牡也とつう神宮より六月十五日荒蠣乃御贄とつふなり新かされ我
一種よりいびかととれとるは洋海中に生る石より着ぬとりく名つくつう
南産志より草鞋蠣也貢師泰の詩に蟹と齊分牡蠣田とみたりとく

化生をけりあり又蠣肉化して蟹とみたりとつう千載集物名にかき
らみたり蠣房也

かざ 鍵鑰とより鎰の字と月は八非さふより倭名彼とみたり屈曲乃
形さまハかみの我なる一がみ及ぶ也倭名彼と鑰匙ハ門のかき鉤匙は
これかざ鎖のハ藏乃かざとつう○日本紀に毀角申鉤の鉤とかざと訓也
又是ハ三代實録に鉄鉤五十五柄とては物とく兵器也との形れ似る
りく倭漢ととも各同くす今もかざ鑰とつう抽り
かきて 俗に能書りのとつ西宮記に書字とて西土ともとつう日
本紀に八書生とてたり

かざり 限量とつ日本紀に節字とて訓せり○神代紀に純男とと
これかざりともみ倭名は直衣乃かざり枕草紙に門のかざりかとのけ
とれどつうとつふ也

かきあげ 隍と掘くお堰を築たるのこれ城とつ障徼也とつ墨と
より○靈異記に窆とより衣裳と撥上る也○類聚雜要に撥上管

かきなを 神代紀に畫とあり古事記に畫鳴とあり鳴と訓く耶志と云と
又てたり○古今集にかきなとありふも撫鳴琴に義也大神宮年中行堂
又琴をかきに撥と云たり

かきしん 押字とも花押ともなり或はた字花書と稱を歐陽文も俗
以尊書名爲押字と云り堂上より判じよりいへく名案と云ふは是
花押かきハ也より名案と尊名と云り又名案と云ハ所云二合と云ハ文
子より又家僕に化るハ文と云りいなる也と云り一説に尊名ハ二一字と
文字小一ト一字と花押とも也二合ハ二字と合セ一字の様ハ花押ともいふ
ともつり判ハ奉行役との裁判也其判ハ花押ともいふと五花判かといふ
故更ありより謬く押と判と云ふなりと云り康富記に鹿苑院殿普
廣院殿兩代ハ義の字也勝定院殿御判ハ慈の字也と云たり判行とも
判印ともいふなりと云り○花押ハ皆自名と破ふより古代官人簽署乃文
字に官姓と題しる名と云ハ今自名と云くより花押と下ハ從也
群談採餘に四朝押字之製上下多用一畫蓋取地平天成之意と云り

たり○押と署と云ハ上より印とトも西出ハ其法ありと云り○判署ハ日と
判ハ名と昏也と云り可別

かきたつふ 提擲のともふ擲起ふ義也燈橋とかきなと云りとも
そけよかきらげとみたり○泥水かといふとも同一

かきかがそ 源氏に筆と云りかきかき西出ハと筆翰如流と云
えたり

かされたま 日本紀に部曲と云り民部とかきべと云りみと藩屏と
かほと云なり

△かく 書と云り全浙兵制に寫字と譯せり朝鮮に寫字官あり○
神代紀に畫と云り○簀植とかかといふハかといふ乃義とむ反く也俗
小丈六とかかといふも同一日本紀に植小かんと云り亦なりかむ反く也○琴
に撥と云ふとも云く之たり○耻とかかといふハ出たりと云り亦や五榮集小書と云
らむと云あり○かゆみとかかハ扒糞と云たり○垢かか垢離とかかといふ同
一汗とかかといふも同義なり○ゆかりとかかハ撥眼と云り字書に撥ハ亂

也とて手動也ともんたり水とかも同一神代紀小沈濯とかまつとよ先
て○つびさとかくとつ何平家物語にみゆ攪乃我かふ一○輿とかくハ
昇字をよめり○如此と神代紀にかくとれともつ又かくのどらもつ如是
も同一左傳の若而人ハ而ハ爾と通をふとりくもふ也とつ如之とよむ
ハ少異又如許とよめり徳とよむハ俗語也徳地徳摩等比徳に○之威
とも毀傷ともハ捨と意通ふもや○掛懸とて子俗にかけるともつり
ける反く也○田とかハ耕也尙に澤田の代ハくれくがうかとあり○物
とかくとつ酒香童子と頼光と射とついざ捨たまふとつひいゆるとなり
○東帯にちつと作ると今かくと立るとつ○鉄砲とかくとつハ銃把とみ
たり銃的とも同一○騎馬と鐘りくおとかくと入るとつ
かく 新撰字鏡と嗅とよめり香とかくとつとよむ其不我より出ると何さるべ
一真名伊勢物語と聞とよめり○家具ハ臨濟録に是作屋裡家具と
つたり家貨也家史も同一今もつ饌具とつり○鐘とつハ銃具乃音也
く 扁榜と額と称するハ九代實錄東鑑に之伊佛祖統記に宋太平

興國二年賜天下無名守類とつり類ハ懸とつりおとつとつりつり一徒然草
之申○樂ハ月令章句ハ五聲ハ音合為樂とつり雅樂はつり俗樂はつり○ハ鼓
ふかくと移るる也ハ樂の之を鼓とつり呼なるとの如し○死ハ小称をる物
ハ續修の不也是ともを鼓とつり出たるるなり一種類多し
かく侍 隱字とよめり目暮とつり我也又かびると通せり祝詞に日隱處とつり
記ハ賢とよめり之潛とつり○繫とつりつひとかつりハ繫念也○隱とつり
及野池園と伊勢神宮此邊雨宮の間とつり今らひの心とつり也倭姫命の隠をせ
一虚とつり常明寺内の岩窟と指とも微をきつりつり神代紀に死字もつり
かくも 藏字とよめり今隱の之我也菅家萬葉集小賢とつりあり○度とつり
ハ論語のほは匿也とつり○万葉集ふかくさふとつりたりさふ及を也○神代紀に
葬とかつりもつりつり葬藏也の義るれハ也

かくら 神樂とよめりめんらくとつり音便とつりかくふかふ一らくハ樂
の音とよめり○樂とらくハ音にふハ太平樂五常樂の類是也通鑑梁
武紀の奏回波の下胡注に音洛とみゆとつり○凡そ神樂は始ハ天照大

神樂窟に入らせたまひし御孫女君比祖天鈿女命の御優ヨクキより事記まうより
 舊交紀よも命孫女君氏供神樂美とてたうされながらと岩戸がくれと
 畧したる神女とてたり○内侍所ウチシヨの御神樂八長之れ頃内程焼亡より
 姉子と伊源按イノケまふたり○伊勢れたる神樂八足利の法よりたう○神
 樂魚つり○かぶら鈴とふ草つり○諸國よもく戯曲とをふて神樂は
 三重郡阿倉川の云氏也神鳳按ハ能良川御厨とたり○神樂岡ハ洛東
 吉田より又奥州より田村將軍逆賊高九と我ひし所也

かくふ 神代口訣ノ菊字とあり屈乃我也篇海ノ菊ハ曲背也とあり
 今西偏よけ語をたり

かくろふ 延喜式よそゆ隠る也ろふる也萬葉集ノ陰比カクヒとて追難咒
 文ノ隱良比年とそゆり

かぐハハ 藝書ノ天我萬葉集ノ香細とあり今俗かいうむるところ
 かぐ乃と 日本紀ノ香葉とあり今此稿也とみたり古事記ノかぐ乃
 本ノ實とそゆかぐハ香ノ音香山はかぐ乃とすむの類也

かぐま 倭名汝小結菓をかぐれあまると割せうからんだともりながら
 物也とあり香葉れ沫とふ我乃江次第小ハ加久繩とあり古今集

かぐやま 古事記ノ阿蘇能迦具夜麻とて日本紀ノ天香山とて萬
 葉集ノ天降降天之芳集山人天降純神之香山とてみたり大和十市郎

かぐやま 古事記ノ阿蘇能迦具夜麻とて日本紀ノ天香山とて萬
 葉集ノ天降降天之芳集山人天降純神之香山とてみたり大和十市郎

かぐやま 古事記ノ阿蘇能迦具夜麻とて日本紀ノ天香山とて萬
 葉集ノ天降降天之芳集山人天降純神之香山とてみたり大和十市郎

かぐやま 古事記ノ阿蘇能迦具夜麻とて日本紀ノ天香山とて萬
 葉集ノ天降降天之芳集山人天降純神之香山とてみたり大和十市郎

かぐやま 古事記ノ阿蘇能迦具夜麻とて日本紀ノ天香山とて萬
 葉集ノ天降降天之芳集山人天降純神之香山とてみたり大和十市郎

かぐやま 古事記ノ阿蘇能迦具夜麻とて日本紀ノ天香山とて萬
 葉集ノ天降降天之芳集山人天降純神之香山とてみたり大和十市郎

かぐやま 古事記ノ阿蘇能迦具夜麻とて日本紀ノ天香山とて萬
 葉集ノ天降降天之芳集山人天降純神之香山とてみたり大和十市郎

かられ義からき芝とと得てふふきたるごとくふふきたるごふき○かれ
みのとふ草紙ハ我實ととふをみきありふくエととれととふ
よふ功ハハぬむに似たり

かくのごとれ 若而人とかくのごとれひとふありた傳より之傳注ハ如常ハ

不敢嘗とそふされど是れ人と奉る不詳なるべし○書經ハ若もふふ

かくかのとふ 日本紀ハ覚賀鳥とあり高橋氏文ハ其聲賀状久とい

つるみさごふるとそ

かぐらのとふ 東山古田の山也類聚國中ハ康樂野と也○ハ神殿ハもとよ

て神祇官小あふふく神祇官絶く後と残るハ天正十八年四月

十八日ト部兼右卿今の新小遷せうく今神祇官代小用わるとそ

△かけ 万葉集ハ雞とふく日本紀ハ庭津名かけハはるうとそ催馬樂小

七かけらとゆぬ也とハはる色とふくふ石也家雞の音とふハ僻處也

とそハ梵ハ雞聲と梵ハ羅とそたり○物成かけハをふとふハ瞻字の

我也商物小つふと我同ハ源氏物語の君乃所ハ鳥成けといふこと

そなる○器物のかけとふハ御談正音ハ缺とそたり

かけ 影とよりてハ氣乃我ふふハハいけとそハ景ハかと日よりあふ

日景とそ子ガ如ハ○陰とよむハ向日のつるぬ所ハ括とそ影ハ日

光ハ括とそ也○かけよかふとつひにのむけかどふハ日本後紀ハ道

邊之木夏垂蔭為休息處とそ意少く蔭庇也とそ古事記ハ爾もよ

めり軍防令の義解ハ爾如謂方とそたまハかたとよむハハと蔭親

の律語よりかなる成ベハ父祖の爵ふらうく位ハ叙とそふと得る成

蔭子孫とそ同ハ日本紀ハ頼美皇之靈の靈成みげとそあり音書ハ莫

不盡其徳宇とそなり○倭人の瘦弱とそ成かけのふきとそハ風俗通

ハ老人子無影とそたり夫木集ハ

日にそく姿セかけハぬふかやせ乃里ふつと成ふとそ○倭名

彼ハ駒又騮とより鹿毛の我也驃とよりかけ赤驃とわくげ鳥騮とそか

げとより又黄鹿毛花鹿毛鹿毛とそららら鹿毛また鹿毛乃

品なり○源賴政の子孫ハ鹿毛ヒ馬とそとハ仲綱ハ木下とそけハ鹿毛

八鹿寄り平宗盛をよけしを治まはし源平亂の基とあり一とあり
也○信濃望月並小御牧七郷の内八鹿毛の馬を置以他より尋ふと一宿
と許さば不足望月れ伸のきらひと傳り

かけ 崖と懸崖とを懸の段ふふ一信小峠とされと塔八谷と意因一
或ハ破とあり坂也と注せり

かけら 倭名鉄と成道やまのかけらとをなす奇よ右のかけらとハのかけらと
ことよりあり成りたり掛は道と也或ハ鉄路の義とあり

かけて 懸ての意を兼ての意もなり馬字保勢物作ハ直ト兼初とありかけ
ことよりあり成りたり掛は道と也或ハ鉄路の義とあり

中くふひもともなく成りたり○かけらとありか懸の意なり○春はく是はくか
守は多の今昔物作よるなり○かけらとありか懸の意なり○春はく是はくか

冬より春向く春より夏向くの意也又豫字は意とあり行未はくはくはくはく
是也定家に千五百番れ判り春は始秋の終あり春未秋未ありはくはく

べからせとるなり○源氏よ昔のゆけらしひと掛とを解はんとるこ
たり陳孔璋の擷文よ擷字挂細羅動足觸擷陷とあり如し

かけを 徒然草よかけをけかきとありかかけ合ぬ我あり

かけご 源氏よみぞびつありかけごよ入る類聚雜要よ懸ぼとる西
の書よと替箱とあり

玉うげかけごよりとる懸階の義即接道也一書よ吉履破長八十
かけひ 算字とあり以竹通水也と注せり又規とる中懸植の義也

かけえ 日本紀よ磴とあり懸階の義即接道也一書よ吉履破長八十
二丈との塩尻よ伊奈川の摺二十二間余木襲第一の長栲也柱かく二重

のむねまを五岸より出し中の水尻拵九間持をさし懸をり水際よ
五間三四ありとあり又昔ハ萩原澤とふ谷あり大木と鎖をくあり後

一たり八九十年前まゝ其鉄鎖きれ残りありとあり古記者語り今
のかけ橋よハのくひとる元明紀よ昔信濃美濃二國の間峽岨あり

てを治るなり一ふけ橋をうけてを治りし事とゆ一音よの岩井野村にけ橋長三七十
又同欄十つう折る十二間石垣十四間是慶安中造る所と云ふう治治治よ此余
う馬ちの橋の鉉此本りとりとて踏折てと云ふ昔ハ藤萱とて橋を
縛一鉄鏈とて析とす近世ハ尋常に橋にゆくを橋杭と云ふと云

かげこと 日本紀ハ山陽と影面と云ふことなる萬葉集ハ影反とありか
げつねとの我つた女と云北山抄ハ山陽道と云ふことなる道と云ふ

かげらひ かがらひひとと云の陽候と云ふ影反日の我也野馬也遊絲と
同一万葉集ハ炎字と云ふことなる大影也かげらひことなるか

こと 〇古事記ハかきらひのと云ふ事なむらと云ふ事ハ八束の火炎
と云ふ也万葉集ハかげらひれと云ふ事野と云ふ事ハ荒野と云ふ事ハ葬火也

かげらふ 中比よりかげらひと云ふ事也かげらふのと云ふ事春日か
どふハ掃伽徑ハ云ふ事春時候也〇雲ハかげらふことハ陰と云ふ事也

ふ及ふかげらと同一古事記の句ハ夕日のひびき宮と云ふ事なる候
ハ夕日ハ日隱處と云ふ〇菅家万葉集ハ遊絲と云ふ事かげらふれ

うわらぬことと云ふ事是也詩よと天外遊絲或有無と云ふ事〇かげらふの
ふらふ事かかたことハ蜻蛉と云ふ事倭名抄日本紀ハの童蒙抄ハ云ふ事
づのちひと云ふ事かかたことと云ふ事蜻蛉の一種極めく細ふ事かかたこと
本草ハ七蜻蛉言其状伶仃也と云ふ事水辺の本懐よと云ふ事の飛鳥ハ
歎と水と点ハ閃と電の点と云ふ事ハ陽炎ハ比ハ云ふ事なる万葉集
ハ蜻蛉と云ふ事玉蜻蛉と云ふ事かかたことと云ふ事也かげらひの蟹垣と云
けはると云ふ事かかたことハ玉蜻蛉ハ蜻蛉目と云ふ事埋けハ青珠と云ふ事
博物志ハ云ふ事と云ふ事又燈火の一名蜻蛉眼と云ふ事家瑞記ハ云ふ事〇蜻
蛉と云ふ事蜻蛉より轉ハ云ふ事也かげらふの女と云ふ事ハ父送ハ舞采不終朝
蝶と云ふ事見事と云ふ事なること今ハ俗蜻蛉と云ふ事と云ふ事〇魍魎と
云ふ事ハ一説也心得がこと〇貝ハかげらふことハ紺色也人の爪の状と云
〇かげらふれ小野ハ吉野の奥にありと云ふ事ハ野と云ふ事と云ふ事ハ
まけらふことと云ふ事ハあらび

かかれい 掛帯とあり云ふ事ハ女の家也玉だを此の類也からまぬと同一地

く繻のうから衣着くは上裳のかけ草と頸よかふる也こそう○古佛伊勢系詣記に木綿鬘の白きとりく男ハ冠絨袴ハ掛帯の赤ととて女ハ身と世ふ是則陽ハ水ととて身と紫ハ陰ハ火ととて身と清ハ水ととて身とこれハ陽神ハ水とこれハ陰神泉津ハ水ハ穢大の縁也

かけんは 倭姫世記に稻のりハ懸久真ハかけ奉ふこそう今ハ日本紀に真とよかり後河上懸統とこそう穂かから青竹よけく奉ふとよ今と神宮ハ其式なり

かけまくと 後河上ことばせうく可少と神後ハ多くよけりかけまくと加こことふハ言の葉ハ掛んと畏し多きとふ我也あく反じ也元明紀に開母威岐とててけまくも加これとよけりわか同韻なまばえうよけりふや万葉集よこらけを問の宜き朝妻のとこなる開とつけ又あけかとよむハゆり或ハ由灼の字とよあふハ心得と

△かこ 水干とよハ鹿子の衣とく播摩の鹿子水門も同衣かふり一詳小應神紀よこなる萬葉集よ

△かここの海は知られ来れハ海中ハ鹿をかかふるわらととのかことよけり應神紀の故妻よけりなるあり

かこ 籠とよむハかこむの義かこむハのを死なると目籠とよ算とよけり○駕と籠ハ同一常ハ清輿と呼りて籠輿とよけり起マとく西後ハ後よ出来たり○鹿字とよむハ鹿兒の衣也万葉集よかこむの鹿子とよむハ鹿ハ子と二ツニツとよむ也とそり○倭名抄腰帯の具ハ鉸具とよけり即帶鉤かまばかの衣也亦ハむたら帯のかごととむかかごととたり○鞍具ハもつるハ今の鉸具頭ハハ鞍頭かとのるもの也とそり○材木よかごととふ木あり樹葉標持ハ似たり小弁実と結り又姜濃めく紙草とよかごととそり

かごと 假言の意こそりかこつ意もも虫の意少も用なり○伊勢物語の何のよのせしかここと真字ハ神言と填たり驚物とて成ハ一水かろ一弓かろふりやう上白くすけい我や水言の駿馬ハを殺すてけり新ハ也巫の如かこつ 白氏文集よ託字とよけり借言とよむ我とを反つ也今宣とのと

かろしき也○かこらぬハ伊勢鈴鹿郡の原村より後花園院の皇女住
せらまゆりゆかたの記よこたへ

かくひ 倭名彼は梅とかふとよらう廣韻は圍也説文は柴壘之とよたう
又樊とよらう詩經は梅をけかひと移るもの是也金葉集は田山か
らふ垣柴夫木集はかくひをかき柴けつらうとよらう隱るとかくらふ
ともつハその成あり○物成苦苗ふとかふとよらう七同成ありとよ
童蒙頌讀は梅とかふとよらう○世は茶寮とからひと移るは珠
光慈照寺は界内東求堂の東北は一室と設け同仁齋と名け四席半方
丈の室よちとよ屏障是と圍うりよくは移あり四思貫半とよまといよた
こふとよらう

かこはけふ かこらたはなれ我矯字の意よつあり或ハ護字とよらう日本
紀よ説はつづくとよらう言部子義也

△かさ 蓋をさどよらうハ重なりをさるる一細かさ蘭かさ菅かさ市

女がさ局かさ此がめがささかしの蓋はさささ平がた田笠墨笠あり後世
笠守都言笠小田笠あり又天和の比ハ笠はら笠元祿のころハ笠を
まじり寛文の比ハ江戸まじり女の褌笠と用わたるあり○かさよ笠かのとい
ふハ蓋の音かきなり○海東諸國記は若通過専長靴笠而遇といハ笠
と得たり○倭名彼は笠と信ふハ笠とつと流せり今たつとさなごさ
なる物ハ之の字音とらびなくハ大傘地よさささつとふあり一西也ハ堅
笠の名なり○瘡と重ねぬふとの也全浙共制の奇也

ひらぬハたかりとられれどか一のたれささととらぬさむけ
義笠とされ瘡よふたり也倭名彼は疵とかささかきととらと割せ
り新撰字鏡は箇とかささささささささささささささささささささ
ささのた卑ささささささの頂上とつと何ささハさささささささささ
原頼通公関白より時婦女笠以戴き襷を着と禁ふ○かさよかき水かさ
かこつと七同一倭名抄は暈を日月れかさとよらう蓋の後夫木集は
旅人のむかひ道々出ぬらんささささささ有羽の月

かき 口語よりハ氣に意や西の書は吹滅燈燭氣硫磺柴烟氣葱蒜醋
酒氣溝渠汗濁氣をこり

かざり 挿頭死とより髪刺の儀なるより康保三年二月花宴藤伊
尹奉詔折死挿頭三脚頭と云々紅葉と云々より八保氏より八保氏舞人
著冠必有挿頭死用其時死也と云々より後より前縁死と云々より
時からぬ死と云々挿り入り嘗ての時天子の挿頭ハ銀の極死也と云々實
遺事より御親挿頭之中より中宗士種題也○と云々これかざりに
こそる白頭の儀と云々よりハ海神の波れ死と云々より子也萬葉集より
山はとのまのふみつれと春づまハ死かざりりら紋それハと云々かざせり
と云々より○云々入りはありありと云々よりハ定家々の後よりハ
人ハ茶などと前より云々鹿よと云々と云々よりハ代かざりと云々より
つり殿字と訓と云々是也

かざり 文體と云々風流の意より並異記に檀と云々み重蒙須韻に貴と云々

かざり と云々を云々活體の衣也天子御體と云々ハ髪のみなり
かざり 倭名鏡に推叙と云々めと云々より新撰字鏡に鏡と訓と云々と云々
蛸蚌也と云々より蟹も似くとも云々より名なる成へとも云々ハ整也ハ大ハハ
小也倭名抄に云々のむらぬと云々より○汗衫と云々むらぬ也りと云々汗取の服
ありより後より女童のうむせれり云々かざりとも成へともと云々新葉集より
もろ人乃あとかあやと云々と云々かざりかきみのを云々せと云々

かざり 羽葆蓋と云々傘の義系記と云々用と云々より名なり也
かざり 中右記に仰可射と云々掛之由と云々より寛治年間れ也と云々と云々
と云々射より後より遠笠掛と名づけの何と云々と云々時より云々ひくも云々
より源之義史補の記より云々ハ櫓板より牛革と張たりと云々と云々後乃
更なると云々と云々小笠掛あり遠笠掛と云々と云々東鑑より云々乃風なり

かざり 中右記に仰可射と云々掛之由と云々より寛治年間れ也と云々と云々
と云々射より後より遠笠掛と名づけの何と云々と云々時より云々ひくも云々
より源之義史補の記より云々ハ櫓板より牛革と張たりと云々と云々後乃
更なると云々と云々小笠掛あり遠笠掛と云々と云々東鑑より云々乃風なり

とろろ

かさとり 風折と云鳥帽子の多しつゝ文献通考に朝鮮國之戴折風之中と
之をなまばはよんふりや或は定家つより始ふりつゝ今ハ林山子中の故夏
と撰せる本へ〇鳥帽子は九折右折と云ハ前の方れたらうくきりたる目の
中も片も中跡まゆのふりやをへく折と云ハ製造と云れぬ也今信は風折鳥帽
と云と誤るゝ九折右折と云は法を分たよ非也と云

かさとき 日本紀に風招とあり嘯也と云は是ハ嘯く風と招きよと云也
かさだち 餅を刀とあり法の如く玉と居たりと云は中即會ハ嘗會を
こゝ用ひたるを刀也と云は餅扱ハ古物飾銀大略本地と云は後白河法皇
の御賀ハ菩提院園白紫祖池の金依の螺鈿と帯才韜の上トハ卧龍と水精
みくせり是飾銀乃由月輪殿下の記より云たり近代古物考より云は尚書の
飾銀と用うと云

かさもや 風速乃我伊勢物語ハ我々かみの風と云はあり伊豫國ハ風早即
ち伊賀風云記ハ伊勢加伏波夜之國と云ハ神風伊勢れ何より云たり一志
飾銀と用うと云

即ハ風子池風早社あり又風早浦ハ駿河蘆原郡あり

かさとりは 日本紀ハ法馬飾馬と云あり其具甚多しと云中ハ腰鈴とハ
一多ハ驛鈴とハ別あるべし藥袋と云は馬藥を指し

かさとりく 日本紀ハ蟬と云あり冠ハ附物物きハ飾串のハ我ハ草庵集連
行よとの位高きハ虫のかつりありと云ハ梢の蟬ハ我ハ草庵集連
ハ我と取りつゝ靈異記ハ蟬冠と云みゆ

かさとり 衣笠縫をときと云ハ衣笠御くのと云は衣備と云は
ハ漢ハ種ハ衣をとり物のかく鉄曹の制との始めを云ハ衣笠と云は
と云ハ新撰字鏡ハ錢字とかつりあり云ハ二合れ意を指し一説ハ衣笠乃
ハ我ハあはれ挿頭標カサトリの畧也今帛と曹ハ眞ハかく其形短尺の如し西云ハ之を盛
旗を云ハと云は盛表記ハ衣笠のゆハ非分の紐とのかさとり
がかりをきと云はこれハ飾標の義と云ハ同云ハかさとりと云は右れ袖と云
けり云と云は東鑑もハ曹後身笠標仰曰此筒袖為尋常儀歟と
云はなり今川範國赤鳥ハ笠標と云ハ婦女の袂衣具と云ハ垢抹の義帽巾の類也

かさりのりてき 源氏内かさり其基らんをたててと云又冠其基也と
 する○延長御賀記云三押頭机一脚有銀山銀水金銀瓦樹等と云
 かされ乃こー 舟多く七夕よあう鶴のうもれ橋鶴のこせをこー鶴
 のちのち橋鶴の行合れ橋をよあう淮南子よ烏鶴填河成橋渡織女と
 云ふ故みよあうつもされ橋も同ー○又宮中れ御橋よあうつも覆懸詩
 よ烏鶴橋遠敬御進と云たり○曉の異名よあう八鶴八黒白と兼れよあう
 夜と表一橋ハ不通と云は物かまハ陸陽の情の相感をよあう意とあたるの也
 △かー 日本紀云檀又橋とあう堅れ我也堅木をかまハ名とせう行よ堅かー
 と云あうあう後人樗字と造れよ也中傳信録云八羅漢治即樗木と云
 えたり若楸と訓をよあう春かーハ血楸也白かーハ志の部よあうあうあう
 ことかーらうよあうかーらうあう新撰字鏡よ核と水かーハ木とよあう
 又楸白楸熊かー言史記よ云○人言八檀とりく賀をかまこく言史記乃
 行よ其意云たり今松と用らるる如ー○萬葉集よかーの字の揚もとほ
 つけらるハ推の字ハ聚て結ひ栗かとハ迷の内よあうはとあうよ封よあう

○蝦夷ハ異魚なり其鬣極く長形江豚の如し鯨と觸れハ死を其名をかー
 子刺雲の類と云る○つがかりあれかーの類ハ甚ふ辞よあう伊勢物語よあう
 をかーと云るゆ後拾遺集よあうぬ回ハまよあうかーハ和物語よこくも
 さハ志まらるかーハ類ハるる成史よあう河也と云るゆかーとかーかつかー
 むつかーよあうれ類ハあうと云るゆと紡りたる也○倭名抄ハ我柯と云る
 以繫舟と注せり萬葉集よかーあかと云るかーあうたくと云るよあう是也
 今と云るつる河岸さどもあう即と云る林也漢書地理志將柯郎の注よ
 將柯係船枝也楚莊臨伐夜郎採船於岸安戰既滅夜郎以採船將柯處名
 為將柯と云たり○俗よかーらうつくかーと云る草木の葉よあう虫のへく枯る也
 かーく 炊さうらう神代紀よ為飯と云ひかーと云み新撰字鏡云彈と云ひか
 ーくと云み釜と云かーと云らう今つ飯と云る也○簡牘の尾よあう八惶と
 かーと云ある意あるかーと云同ー

かどき 仲正の舟よかどきと云らう北國よく雪降き時ハく也標と云らう
 史記よ橋と漢書よ朽と云或ハ樞よ係る以鉄為之其形如錐頭長半寸施之

儀以下不踏蹴也と注を又かんぢきととらるる平記もとて中軍用も
 さま也今倍皮とくまるとおとびんせはとふかたされ記也とらるる四ふまへハ
 熊手とかんぢきとらるる○般ふと加ふれとふあう人うとらるる飯と炊くよう
 猶訛したる也○伊豫の山中より六木以ちあらして焼て灰より穀以時也火田是也
 かへハ 延喜式倭名鉞ハ梅拍とともふらるる聖葉ハ我多るる御綱拍長母
 拍長拍拍の葉かへハ加へハ等の別あり又ら法葉と酒の拍よとらるととてた
 了玉拍本拍兒字拍青梅干梅あわら加へハかどハ一種の内ゆく形色の異ら
 也○大和抽括よかへハとらるる文とてたせまそ人乃さ儀也らるるも器
 物の類よかへハれ名らるるハ葉盤葉梳の意かぶるる○古事記ハ又御酒拍と
 あらハ杯乃るる也大嘗會式ハ午日造酒司人別給拍即受酒而飲詔即為饗
 而舞とて中○日本紀ハ葉と加へハとらるるゆくうつら拍拍とて松葉とさし
 る松のかへハとらるる万葉集攀折保寶葉とて子題と阿野家の本よりか
 へハと点せり奇みとて加へハとらるるみたまはちあふきふふこそ○雞又蛤
 のふよかへハとて梅の葉葉よ似たる也○草のことに加へハ形あり○かへハ

草あり葉形似たり○かへハと野伊賀阿持郡より四名類聚ハ藤野ハ作るる
 載の科ハ高粉年更かど奉りより名くとと拍野市とて此處也拍原ハ近江也
 かへハ 倭名彼ハ頭とらるるらるる在る若きも我也とらるる○人の異体とらるるあふ
 かへハとらるる字治拾まよとてた○かへハたらんと頭目人たららるる西に
 えたり夷人魁帥の稱也

かへハと 日本紀ハ郷食膳膳天拍手等と訓けり又古ハ九を飲饌皆木葉とらるる
 器とらるる葉盤葉梳折敷かどの名らるる北史倭國傳も倍無盤組藉以擗
 葉とてたり梅ハハぬきせさきと神代より百机飲食とてたればとて盤組を
 きよハあふハ○郷食舊酒宴かどハハと拍てるる儀ハ日本紀の新室酒宴ハ處
 くと手掌やららるる拍上賜吾常世等とてたり神狩ハ拍手とてかへハとて
 ハハハあふハ一言事雄略記ハ一言主神れも成拍なふらるるてたり西ふと振
 動狩とて西手と撃て狩もらるる常の拍手ハニツ老うつ也拍手とてハ非を
 魏志ハ倭人見之人所敬但搏手以當跪拜とてたり○大和よかへハ村よりかへハ
 てけ森ハ伊勢負弁郡交村の西より風去記とて中○一説ハ拍拍字の近きと

之乃くさか洞也曹文姬の詩に霞衣曹慈御爐香と云之たり○霞の園ハ
氏系也霞村浦ハ常陸也霞洞ハ津の云水無瀬の北より

かそが 春日と云むハかそむ日れ云云日本紀萬葉集よもほのひ乃かそかと云ふた
マ○地名ハりとうり糟垣より都より一姓氏係よ之たり○併工春日と云ふ

ハ河内春日部の人あり元正帝の時乃松岡文主督主動也○姓ハ六兼久の東兵と云
かそむ 日本紀に掠略など云あり續日本紀よかそむ集ひと云ふも同云ふ云一

かそむふと云ふ云及む也赤條在門集
使阿ふ来ことと云ふ云かそめりけさ春めけさ梅のま枝と

かそがひ 延喜式に鏡字と用たり切程式に新鏡と云之たり韻書よ考之得依
かそむをふの云云あり新撰字鏡に録とあり下云集に鏡と云ふ今ハ録に用

う俗の造り字也辭水該綺工蟬蝗絆と云之たり○催馬樂よかそがひと云さ
いと云ふハ云れけね成と云ふ梁塵抄よかそがひハさざいと持の金也
と云之たり

かそみりへ 道途院記に霞拍麈世抄に用倭僧と云ふ雜言抄よたき抄乃

△かせ 倭名抄に甲贏と云り催馬樂の音云之たり今肉膏と云はと云ひ哉

とかせと云依渡と云其成ふと云勢州と云かぶと貝と云ふ抄也其ハ海膽也と

云り○元正紀延喜式に柿と云り倭に柿と云かせと云ふと云ふ云云
つと云け云ふ云一父永遷宮記に糸一柿巻糸器也と云心城國鹿背心と云類

聚國史に柿と云り破石集よ本成かせのやうに云ふと云之たり○群阿と云ふ
と云ふ又短水依岸と云り地かせと云改鳥の音也七かせと云り○校と云ひ

るり説文に木囚也と云たりかすと云り○痘家れ収醫とかせとい痘及小
瘡よかせると云ハはは云ふ我の體に云○鹿背心ハ赤津の東一里餘也

かせ 風と云りかせ及け氣の云ふ云一又生をれ我也物風と得く生化を云
風字虫よ从了神代紀少と朝霧と吹撥乃と氣風神と云ふと云り○風ハ陰陽

の自然あり一蠡海集よ春の風ハ下より升又夏の風ハ空中に横行と云も
と云り○倭名抄に微風と云かせと云り○風と云ハ疾風と云ふ也○風の聲ハ

は風祝部の名なりと後頼雜談抄にたり袋草紙は詠訪明神の法は風の祝と云ふ
と置る春の始はく花居る百れ間尊重はされハ風諱くふく農業れたらふを
也そ然らと有り日れ是とてぬまハ風と云ふハとを後頼朝臣

信濃ある本曾路の松原より風のそりよまを凡回有りとも

△かぞ 神代紀より父と有り世次と扱ふハ父と有りそんがまふと有り一説は子
生れくまが物成れつふより後教ふ有りそんがまふと有り又父子とぞこと有り
顯宗紀は俗呼父為柯曾と云又家名の者もて右例ならすと有り
かぞふ 教と有りかむと有りかへたる詞也そふぞ也右事記に讀度二字
と有り

△かた 形象と有り日本紀に圖と有りありて凡回は僧かくみ成かかかくと云
像のふ氣也○文とかくと有り形の不規形錦車形錦かど之たり○ト北白
象とそかどと有り万葉集一のぬつと有るかまぬかどと有り○形象の
まはか位有りちく方と有り○貴きくは幾方と有りは幾柱と有りかどと
○方位もく相交ふべしと有り○方よりハ偏也と有り偏と有り

△かた 片と有り偏の意也源氏よりかど有りたか多と有り○物より半ありと
た調ぬ意ありと有りかまけかむかむと有り類也○肩ハ堅き折ありと有り
釋名と堅也と注せり○鴻と有りハ倭名也と有り子鴻乃類也潮の引たか
の形と有りあり一萬葉集に齒と有りハ新撰字鏡に例も有り○人の名に
賢と有り堅と意通へり

かたち 形体と有り堅はれあり一神代紀に狀貌と貴法と物名も有り○
皇代紀に空系とかたちと有りかまけと有り

かたふ 日本紀に詔と語と有り言語より其象ありハありと有り○
毛詩の注に直言曰言論難曰詔○新撰より承を語と有りハ集るをと有り

かた孫 江次第に結と割せり万葉集にかたぬと有りそハ夜泣かぬハ後
のそぬあり○倭名は痛と有り結のそぬ也血結聚所坐也と有り新
撰字鏡も同

かたし 堅と有りハ形も意成り一氣ふむありと有りかたむかまふと有り
かし○右事記に作堅此國文德實録に奉造固と有り後京極攝政殿

敷物や日本傳根を非代りて居るなりとや加さるを免るん万州難とよむと
 勢と意通火より神代紀と天地の体と説く精、故之令博易、重濁之難、
 之乃形氣の別也。○靈異記に誠と加さるとより今とよむ也。姓と學部氏
 たり。○日本紀に鍛字鍛作字とより今とよむ也。今加らるとなり。又也
 古事記に鍛人曰、夏紀に鍛師とよむと同一。○類聚國史に造錢師とよむ
 乃、靴とよむ也。○何よりと一對あるとの難とたふと加さるとより偏の
 あり。○伊勢物語の如たれさると真名か、難望とあり、され、孟子の因成
 高史之詩也とあるれ、或今俗とよむ辭也。如たれ、或とよむ、あ、硬漢の
 字拍案驚奇より、こたう、韻會に因堅也とよむ。

かたや 源氏物語より、中人の自休より、又物か、とよむ、こ、能と、細く、ぬ、
 れ、ゆ、り、万葉集に、左右或、八、全、手、とよむ、と、より、か、こ、よ、一、た、り、
 ち、は、ま、な、れ、詞、と、よ、む、く、偏、秀、け、た、後、よ、く、又、偏、帆、の、み、ま、追、手、に、帆、と、か、か、
 真、帆、と、よ、む、風、よ、さ、か、く、帆、と、か、か、と、偏、帆、と、よ、む、と、よ、む、か、さ、け、の、帆、と、同、
 河海に日本紀の個儻字とよむ、れ、と、教、に、個、儻、八、た、く、初、せ、り、我、も、又、遠、り、

かたき 敵との難をよむ、れ、後、の、一、日本紀に、無、前、と、か、さ、れ、さ、り、と、よ、む、
 也。○相子よむ、さ、と、か、さ、れ、と、の、源、氏、の、書、の、一、れ、よ、め、よ、ら、く、之、儻、を、今、
 一、か、さ、れ、と、削、死、を、け、さ、り、侍、さ、よ、か、さ、れ、の、方、ま、と、り、情、人、と、境、家、と、の、い、
 の、西、土、の、ま、と、新、撰、字、鏡、に、聲、と、か、さ、れ、と、訓、も、さ、と、同、意、あ、る、一、

かたぬ 靈異記より、句とよむ、倭名抄に、玄索兒と訓せり、道路の如さるとよむ、
 又、物、成、を、ハ、傍、居、と、よ、む、や、今、俗、ハ、癩、人、と、か、く、より、聖、武、帝、に、時、建、悲、因、院、於、奈、
 令、孤、獨、居、此、と、よ、む、今、般、若、坂、に、其、遺、跡、の、く、癩、人、多、う、住、く、銀、と、旅、人、と、よ、
 一、く、同、く、よ、む、一、○伊勢より、く、多、度、か、た、た、わ、と、よ、む、癩、病、岩、と、よ、む、
 つ、く、其、所、れ、人、皆、病、と、よ、む、多、度、の、社、乃、下、より、流、流、居、る、り、所、也、と、よ、む、
 さ、ど、よ、む、水、や、○盛、衰、記、よ、あ、ま、む、と、の、あ、く、か、た、た、お、た、能、物、傳、草、紙、
 か、た、た、ひ、字、法、拾、ま、よ、む、か、り、れ、か、た、た、ひ、の、依、日、記、よ、か、か、と、よ、む、八、日、と、よ、
 か、た、た、た、た、と、よ、む、一、八、罵、く、つ、詞、也、

かたさ 演繁露より、子、疇、人、是、也、不、具、と、よ、む、倚、或、ハ、缺、と、よ、む、片、輪、の、後、車、に、
 ち、く、の、り、破、石、系、よ、む、中、公、年、傳、よ、む、其、輪、也、佛、書、よ、五、輪、と、五、輪、と、よ、む、

世深氏一あるかゝるものと云ふなり○聖異記に尾張阿耨知郡片菟里と云ふ
かたも 片相の事ありや相済の所を夫と云ふもつりては深氏相済は相
済と云ふかゝるものと云ふ是ありてなり真名を醜字と云ふ○枕草紙上の云
ひも八咫と云ふものと云ふと云ふ結と織と片八諸八つりかゝる所なりと云ふも八羽
れりありてなり

かたま 神代紀に龍と云ふ一書に堅固は作る其後ありて無因龍を
かたも之なり○栗國人八擲筭杖の海と云ふ阿波風土記に又云ふなり
かたみ 海名波と云ふ等と云ふり漢具也と云ふりかたまと同し○右今來の死
かたみなど後人筭と云ふり○互ふと云ふ所かたまと云ふは偏身れんを言
の意也○長恨舟の信字遊仙窟の記念字と云ふるは今時の俗なりと云ふ也
事紀に五形見物と云ふなり遺物と云ふなり○かたまは雲かたまの云八巫山神
女は故事也○形見れん石見安濃郡なりなり形見れ浦八紀侯ありなり○若と
形見草と云ふ云々云々なりなり又氣は云々故定なり

かたか 刀と云ふ全術兵制と腰刀と譯せり片刃の云々と云ふと韻通せり或ハ
偏難の云々と云ふ又鑑鏡の云々鏡二の云々と題せり云々云々之云々万葉集もつ
るきたら名の云々のけくと云ふなり其銘に未某と云ふる未某部なりや形なり日本
紀傳に波ハ小刀と云ふなりなりかた對せんも也近き世に未某にかたは八咫
志の云佩刀也と云ふなり諸れに云ふなり刀と云ふ是成なり又かたまは伊弉の云々遠く
ハ右刀也と云ふ近くハ刀を云ふなりと云ふなりと云ふなり鞘の尻と方と云ふる刀と
摸せり云々○陣刀と云ふは後世の物也○玉制ハ禁兵と云ふ私ハ兵器と云ふ
と許さる應仁乱の後安ありたり也海東諸國記に室町家其時の風俗と
述く人戴烏帽之風一刀と云ふ職人其台と圖と云ふ所と亦同し今狂言師主
人ハ刀と佩ひ徒者長刀と奉るなりなりなり今當時の武人兩刀と挟む者或
ハ跟徒と云ふ或ハ應急のたのなりなり云々の世に習なりありなり○天和二年乃
法令に農工商の輩に二刀と佩と禁み隋文帝の時勅使工商不得仕朝進
官なりなり其旨同し○上之船れん方と云ふなりなり

かたど 神代紀に象と云ふり西出れ書に取象と云ふなり訓を成なり
かたたら 神代紀に脇と云ふり傍腹の云也○傍字と云ふも同し紀邊

もよりり俗にふかきとらと加さるるに記言をふべ

かたぶく 傾とよりりかぶくともこの偏向に義也俗にかたぶくとよりり新撰字

鏡^ノ敬ととあり○物^ノ雄^ノくつあ^ノ加^ノけ^ノやとともこのなり○古事記

不相似不傾とあり八上^ノ文^ノ等^ノ天皇^ノ之^ノ函^ノ簿^ノとあり六かたよりりつけぬ意也

かたまり 舞とよりりかどが後^ノれ義とが互也日本紀に悔とよりり聖異記

軒とともみとよりり及^ノも也新撰字鏡に悔とがむとよりり八まを互也

かたうた 古事記に片歌と云^ノ旋頭^ノの^ノかた^ノ也とよりり二百之句ありつひとよりり

かたさけ 倭名抄に醇酒とよりりか^ノ六^ノ堅^ノの^ノ義^ノ尊^ノの^ノ意^ノ今^ノれ^ノ跡^ノの^ノ類^ノと

ふあさびとよりり

かたそぎ 宮社のちまれとくそれたる^ノ子^ノ片^ノ接^ノの^ノ義^ノ也二の^ノみ^ノか^ノう^ノら^ノか^ノ

たふおれ^ノが^ノか^ノそ^ノの^ノ行^ノ合^ノともよりり風雅集に度會朝棟

か^ノそ^ノの^ノれ^ノれ^ノれ^ノ八^ノ内^ノ外^ノか^ノれ^ノれ^ノと^ノち^ノう^ノ八^ノ同^ノ一^ノの^ノ勢^ノれ^ノ非^ノ朝^ノ棟^ノが^ノ自^ノ業^ノ

一八^ノ非^ノ凡^ノと^ノこ^ノの^ノり^ノ内^ノ宮^ノ八^ノ内^ノと^ノそ^ノの^ノ外^ノ宮^ノ八^ノ外^ノと^ノそ^ノと^ノよりり

かた^ノ一^ノハ^ノ 日本紀に堅磐とよりり出雲風土記に滑磐石哉勅故云南位と云

え後滑挾と改ふ^ノも^ノも^ノ之^ノ中^ノま^ノは^ノま^ノ也^ノと^ノ志^ノハ^ノと^ノ持^ノを^ノふ^ノ八^ノ指^ノと^ノあ^ノれ^ノと^ノふ^ノか^ノ
一倭名抄にハカと云^ノま^ノと^ノよりり^ノは^ノ相^ノ通^ノの^ノ袋^ノ系^ノ紙^ノに^ノ夜^ノ行^ノ途^ノ中^ノ論^ノ文^ノの^ノ行^ノ
か^ノこ^ノの^ノま^ノこ^ノう^ノせ^ノう^ノに^ノあ^ノる^ノ酒^ノと^ノ醉^ノ足^ノ醉^ノ紙^ノあ^ノひ^ノよりり是^ノハ^ノ古^ノ事^ノ記^ノに^ノ説^ノ曰^ノ堅^ノ
右^ノ避^ノ醉^ノ也^ノと^ノあ^ノり^ノれ^ノる^ノ可^ノ也^ノ一^ノ今^ノも^ノ俗^ノ談^ノの^ノけ^ノく^ノ通^ノ世^ノ酒^ノの^ノあ^ノひ^ノと^ノふ^ノ
わ^ノか^ノせ^ノう^ノり^ノは^ノま^ノら^ノう^ノ也^ノ和^ノ釀^ノ酒^ノ人^ノ也^ノと^ノ古^ノ事^ノ記^ノに^ノ云^ノふ^ノあ^ノふ^ノと^ノま^ノら^ノり^ノか^ノめ^ノか^ノれ^ノ
特^ノ記^ノせ^ノる^ノか^ノら^ノ一^ノ

かたまろ Pとよりり形代の義也古^ノ今^ノ原始^ノに^ノ立^ノ戸^ノ以^ノ象^ノ神^ノハ^ノ有^ノ甚^ノ氏^ノに^ノ始^ノふ^ノと

この^ノ義^ノ又^ノ記^ノに^ノか^ノう^ノち^ノを^ノと^ノい^ノひ^ノ置^ノと^ノん^ノを^ノあ^ノ○^ノ被^ノ除^ノの^ノ留^ノ靈^ノと^ノも^ノよりり保^ノ氏^ノに^ノ

又^ノ一^ノ人の^ノ飛^ノ代^ノの^ノ八^ノ身^ノに^ノと^ノく^ノま^ノり^ノ時^ノ乃^ノか^ノく^ノも^ノの^ノふ^ノせ^ノん

かたれい 保^ノ氏^ノに^ノ云^ノふ^ノ万^ノ葉^ノ系^ノに^ノ片^ノ生^ノと^ノあり^ノか^ノと^ノあり^ノも^ノ周^ノ一^ノ母^ノの^ノま^ノこ^ノ童^ノ小^ノ

く^ノく^ノと^ノ生^ノは^ノぬ^ノか^ノと^ノ体^ノふ^ノ也

かたれい 一つ^ノ狭^ノ衣^ノふ^ノと^ノふ^ノと^ノ伊^ノ世^ノ徒^ノ抄^ノに^ノか^ノと^ノか^ノん^ノと^ノよりりか^ノ六^ノ偏^ノ衣^ノに^ノ

義也海東諸國記に國字号加多干那凡四十七字とよりり

かたらふ 日本紀に述とよりりか^ノら^ノり^ノあ^ノふ^ノ也^ノと^ノり^ノあ^ノら^ノ也^ノら^ノふ^ノふ^ノと^ノ治^ノを^ノ義^ノ也

今人と方より其意小つるを通りて其細あまも月はかゝらひる女かどて
 たり○之嘗家より古詞と奏するがらひへり語部とあり北に按よ其音似祝
 又後歌色と云たり○石見國美濃郡才田郷小野と云所よかゝらひと云氏らり
 代りれ通各少く本姓ハ綾部氏也持本丸の小社らりて是と守る其家今も
 其く云十八代血脈相續せりてそ人凡秘密扱よかゝらひと語家命とあり寄託の
 意也と云り○かゝらひハ和州の多武峯也方尔集より云り語山と云云
 ゆく訓よ之も也明應七年より多武峯人職冠像破裂自頭至足と云
 加たかー 江次第より結政所と云りかゝね成の義ありて延喜式より辨官結
 政所捺印と云除目かどの教通れ文と云つ小束糸く結固むかどかゝねかよ
 也續後拾遺集小外記應結政座より宮の柱に於て後と云りてこれに
 小くくくくあり
 つかくれあゝの形乃宮柱にかゝらひに柱のさかぬ○新撰字鏡よ喙と云り
 醜と云れハ元宮貞の義ありてあゝ醜と醜と云り○棠梨と云ハ堅梨也
 也小かーと云る

かゝびら 日本紀傳在彼上惟と云り傍平に叙ひらなりかどつが如くた今集
 帳のかゝびらと云るなり深氏巴抄に夏ハそーをハ移り也と云り新撰字鏡ハ
 鋪と云らり香壺のこころをりれ箱もかゝびらと云りあわらまきけよん
 之たり○布衫のゆとそふ六帷よ用る布りて長よそふ也物作と云る
 たり五月五日より八月晦日まゝハかゝびらと云るをより大諸れよ之はり新
 六帳よかゝびら布と云るなり○之帷子らり布をく依る於の部より○經
 かゝびらハ甚調まかきり也
 加たきぬ 万葉集より布加多衣と云り武家礼着衣袴ハ細川頼之製せりり
 ひだかー信長公の畫像と云り素元親依見の邸中と秀吉公と招請せられ
 一は信蕃の土皆三幅の袴と云るをそふ是也と云りされと録倉年中行事に
 録倉殿ハ金禰の肩衣よ小袴と云るれりてと云るなり
 加たかひ 参差と云り西の書よ肩差と云るは其義あり
 加たかぐ 物落よ多く云たり方遠の衣也云白神と避と云り袋手紙と明
 日有還御ハ花洛當文白方と云中金架集よ

居こそ一夜めづれ神ときけふとらふとれまはるん正神と避るとり
了吉人拘忌とせしむにせし時の風俗地産の類とらふに御別殿と林をるも
是也とらふ百練披保元二年十二月廿日金神方違自今以後不可忌避之由宣
下有之とらふたり史と避方忌とらふゆ今も方違のまことゆふ事なり

かたかくし 頑とらふり因塞の我かへるも也日本紀に癡又愚癡とらふり新撰
字鏡に僅又駭とらふり靈異記に陋とらふりくともらふらへかく倒置がらふ
かたらくふ 日本紀に阿黨と訓し漢儒林傳に黨字とらふり偏ちらふれ我
ちらふらちの都にこたう靈異記に償とらふり○又紀に比岡とらふりいとら
是せふなり

かたかたま 日玉也鴨長明かたかたまなり田樂みとらふりちらふらふる手
記に其の我とらふり續日本後紀に命近衛府妻音聲金弄玉及刀子とらふ
法苑珠林に西域女戲五人傳奇云か加至十とらふり
かたがたり 倭名汝に撫鷹とらふり二歳の名也嘗れ一を公玉たかたかた
つふことやえたるとらふらうとつとらふ撫鷹青鷹とらふりかたり

かたをふ 古史記小根之堅洲國とらふ銀作とらふとらふ小国一説は片岡
の意あり

かたふらう 方塞の我北山披上方忌とらふとらふらうけ方かたらう後撰集に
をふらうけ方ふらうとらふ思とらふはれふらうのたふらうかりと

かたぢけふ 光仁紀の詔とらふり常以承辱とらふり難んどもけ乳あり
とらふ也承けかを辱はらふらふらふ我ら彼とらふらふと己と諫とらふ
也後撰の物作かたらふとらふ意通らう靈異記に借又漆とらふり日本紀に歡愧と
かたぢけふかたらう

かたこれつき 偏破月の我七日八日れはとらう新六帖に
こかたか膏曉のかたこれとらふとらふとらふ月れかたけ

かたみのらう 道綱の母れ新らふらふらふらふらふらふ業平れけり
せれとらふり別のらふらふらふらふらふらふらふの水をそこふのこらふらふ布絲
明神の故らふらう形見の水也○後撰集にかたみふらふらふらふらふらふ
の水とらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ

かたぬくまら 神世に鹿の肩骨を扱ふに成せし古事記四巻に神代 堀川百目
かたぬくまら かく心のもろくまらうらとけく有ぬく鹿八妻を合せそ
かたぬくまら 倭名抄に饗饋とよみう半熟飯也と注す 徳政或ハ饗饋は他る
とむか

△かち 日本紀に歩とよみ又徒行とからうりゆくとよみう今とむかちとむか
とむか ○歩率とよみと同一からむかむかむか ○頭取説に陰とみちとむか
ちとむかむかむかむかむか ○服とよみハ褐の字音也 ○物の多くと
とむかとよみ倭名抄に多心とよみむかむかむか ○深さのからハ節用集に緝
地とむかハ藍染の布也あからむかむかむかハ白糸染よりえたり又祝賀の
むかむかを用ふハ勝の義とよみ今かちとよみハ諸れハ之將公陣の時ハか
むかの子孫と用ふ勝色ハ黒き色也とよみハ播州飭磨郡印南の里より
深さハぬきハ新勅撰集にむかむかむかむかむか
将衣をかむかむかむかむかむかむかむかむかむかむかむかむかむか
房に持し餅とむかむかむかむかむかむかむかむかむかむかむかむかむか

也と梅村載集にふたりこれハ秋賀の義ハむかむかむかむかむかむかむか
より起るく各旗の義ありとむかむか
かち 日本紀倭名抄に概とよみ 續日本紀文徳實録に概とよみ 舊事紀に概と
よみ 万葉集に概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ
えたり今ふとの概也日本紀に概とよみとよみハ概とよみ 概とよみ 概とよみ
概とよみとよみ ○概とよみハ面むかむかむかむかむかむかむかむかむかむか
子とよみ也 道徳院のむかむか

かち 日本紀倭名抄に概とよみ 續日本紀文徳實録に概とよみ 舊事紀に概と
よみ 万葉集に概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ
えたり今ふとの概也日本紀に概とよみとよみハ概とよみ 概とよみ 概とよみ
概とよみとよみ ○概とよみハ面むかむかむかむかむかむかむかむかむかむか
子とよみ也 道徳院のむかむか
かち 日本紀倭名抄に概とよみ 續日本紀文徳實録に概とよみ 舊事紀に概と
よみ 万葉集に概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ
えたり今ふとの概也日本紀に概とよみとよみハ概とよみ 概とよみ 概とよみ
概とよみとよみ ○概とよみハ面むかむかむかむかむかむかむかむかむかむか
子とよみ也 道徳院のむかむか

かち 日本紀倭名抄に概とよみ 續日本紀文徳實録に概とよみ 舊事紀に概と
よみ 万葉集に概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ
えたり今ふとの概也日本紀に概とよみとよみハ概とよみ 概とよみ 概とよみ
概とよみとよみ ○概とよみハ面むかむかむかむかむかむかむかむかむかむか
子とよみ也 道徳院のむかむか
かち 日本紀倭名抄に概とよみ 續日本紀文徳實録に概とよみ 舊事紀に概と
よみ 万葉集に概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ 概とよみ
えたり今ふとの概也日本紀に概とよみとよみハ概とよみ 概とよみ 概とよみ
概とよみとよみ ○概とよみハ面むかむかむかむかむかむかむかむかむかむか
子とよみ也 道徳院のむかむか

昔詠きくちやちりく星れためかたれ七条とらうとあらんともあふ八条世
 此故すま究められざあや○かられ長八柱とくうらとときせとらう○鍛
 エとからこつハカさの文信まかぬられ暗語也雲異記に鍛とからとふと
 ちり鍛治とあハ訛也と倭名抄に之をハ鍛治の文字に於ては説也新六帖に
 かしやあるる刀のやさびとらう○佛家よふハ加持の音也前祇經に之密加持連
 疾躑と之申ニ密ハ身口意也加持ハ空海の教に往來所入為加持而不散為持と之
 えらう○申在れ姓よ加地わう○梶治ハ舟後小つ

からゆみ

源氏よ申倭名抄に歩射とらう

からゆき

日本紀よ歩敷とらう風俗通に前能謂之歩と之を于寶り説小

今謂之歩又とくまらう

かららう

日本紀よ扶杖者とらう倭名抄に撒師とらうと楯取の義也西にれお

は梢工梢人かといひ杖と本杖也と注せと相通へくある也実ハ今つふかむ世
 くに新撰六帖よ

うれ林く杖とにのむ船をさふ玉あらんかむらとらうり物によかん

とらうととこたう今つ所のとのハ舵工也

からから

万葉集よ申舵柄也明律考に舵牙と釋せう舵に取末也堀川百首

小ハカぢむらうつとらう柄ととく杖とをふ也

かられも

八雲御抄よ申船ふつへ今羽板と不明律考に舵門とかられ

つと刻もふ是也家隆にといふ船のかられつとらうハ穀の架よよせく
 よらふ也よと今と申しに付を板と若事とらう

からとれ

凱歌とふ勝く時の色とらふ也

からさび

古事記に勝沈備と申勝心の進みらふとらうささびは回一

△かつ

勝とらうりぶう勢せか何ある一○各事よとらふハ無敵は後分る一

一とらう○和とらふをハかてふれ義をば一○助緒のかつハ且字とらう
 字書よ不定之詩とて又姑且也と申之ゆ又此也是也とて之はさハかくと
 つあふと何か之うとらふハ苟且の義也何ふい意と用ひさハ伊勢物語よかつ
 恨つて程と多うさこハ且歌且舞かとし意とく彼是相若ふ交るまふとらう
 後撰集よ

意のこころを記しおろしかりかつははとつかりと意を記すを記す
不意より日本紀に且字とを記すところよりかつを記すところより
八豫字とを記す○名宗は雄とよむはよらふ時也いふればとを記す
いふ○搗きとを記す搗栗を記すより麦を記す縮とを記す撰とを記す
○勝の義は越前安房より

かつて 嘗曾とを記す云々として不詳せしむる嘗とを記すところより
又通して常小化を日本紀に曾字とを記すところより未嘗有は云々といふ
と譯を字雲子に之ゆ又漢書に嘗嘗曾とを記す廣韻に曾經也とを記す
とより唐詩に曾經と運用を○人ノ對一ノ我ノ自由を記す云々といふ
不四季物語に惣門勝手れ方とを記す吉野に勝手明神なりと記す
變命といふ神名に部れ本史に之を記す式に不吉野に神は是也と後
村上院御製に

凡のむかひなきふに中にも誓て一勝を記す神の名を記すといふ
かづく 被字とを記す拾遺集に時夜ゆかづく袂を記すといふと云ふ

や直字伊勢物語に負とを記す○今世家史に記すときを記す云々といふ
是世家史に傳ふに婦人門とを記す八面とを記すに記す云々といふ
云々といふ流球も記す製れ物なり○海に記す八瀝字とを記す被とを記す
水と頭と衝入の義とを記す日本紀に濡字とを記す探字とを記す云々
かづけとを記す波の中とを記す云々といふ是也○倍も我記す人よ
けかともを記す名と負と濡字とを記す云々といふ通ひ西云云
と被字とを記すといふ

かつら 神代紀に杜字とを記す古事記に八楓樹とを記す香木とを記す
撰字鏡と橋字とを記す是に橋なすや倭名抄に八楓とを記す
と云々といふ杜と杜の根とを記す今と云々といふ杜とを記す
いと杜用とを記す杜とを記す八葉の色赤とを記す云々といふ
と云々といふ木犀樹とを記す八葉の色赤とを記す云々といふ
これと今昔物語に天曆の時震且より記す僧杜の宮に杜を記す
試く唐の杜心小勝とを記すといふよと云々といふ八葉の指せを記す

粧をふりて夏より秋邦趣に多し言事記小春本とよあかきと拵りて作社小
 必をいふ浅植たりと云われたともをばとちく浅はく指たる物なりとと
 たりつる材用のろくハ香氣なり〇賀茂松尾かどの業小用をハ材用れ本あり續
 拾を集ふ

維一か毛松尾ふの何ふひ集かつらにちかく其とあけんえこれ中おれひはかと
 つかゆかつれ里ろく月と松尾の何さうなれ、故にさあや新後撰集ふ
 一ふき八日わけふむふあひま月れろくの枝とちやん月讀の社とやど近
 一〇玉ろくくともちやう玉葛玉鬘と別也今と江たあくハ玉ろくと味で

ちとやふ加茂れ業の玉ろくくたぬねりひあひ也り賀茂明神ハ知葛
 城ろくとの一なまひより四季摘作ふろくきと拵あふかえはるそとと
 かかづ一〇かつらハ月のか三五のそれと二升守の謡よるかハ李嬌一夜百詠の月
 詩小柱生三五夕賞開二時と云とろく〇かつらと云かハ昔の却説う故事より
 儒家の及第ふりあふ多う拾を集ふ菅原大匡れ母
 一久これ月のろくと拵ろくそれ風とと吹せて一ふか〇月の拵るふは

西陽雜俎ハ〇筑前國宗像郡桂橋ハと異國退治の時勝浦と号を遂干馮也
 杖の夜れちりひの月乃ろくかさふまぐはく海の中道〇河波ハ勝浦より
 かづら 鬘とよふふハ花鬘也真折のろく日影のけつろく高浦れろく柳れろく
 本綿ろくかごろく又宋志日本傳ハ鬘鬘ととろくなる鬘連の夜をいハ鬘ハ
 鬘此異体也〇麻ハ幾鬘とふり或はく圍ニ又為鬘ととろく〇今女れ鬘
 の具よふとのハ倭名彼ハ鬘とあり倭名かとドとふ是也和名ハ鬘也昔所ハ被
 助其鬘也と云ゆ〇蔓とよふハ鬘小同ハはとろくれ頼也〇葛と鬘の夜あつ
 らむかづらふらろく同ハ十割拵らろくつろくみたりと云とろくろく
 〇新撰字鏡ハ通草と拵ろくと割せり〇楠ハハ篋也たごととろく盆石と拵ら
 かづら 盆らるとと能の鬘と云の器也〇鬘宮ハ宇多帝の女依子内親王也
 かづら 後書れ記ハてあふろくやめおしあま也とろくたろくふととよろく万葉集
 うろくそく菟也とろく昔聞集ハ五月の以圓位上人能生えまろくけら道のるハ
 かづらと云れるととそく
 かづらとく能野あつたれやろくとハらととろくろく〇實方中將の

陸奥少く五月五日のやめかてかつて成ふをたあ故事談ふに伊新撰陰陽書
小五月可算水尊とてなり宗祇旅日記に八藤原義春が可ふ

ちやめ手ひくも七はゆく長き根のいそあされ派お生れとよあかともて
其所の者お致ねしに中將の思ふゆく何のちやめとあぬあつ軒窓よへて
都おねあぶるべしとくかつてをふかせられたるよりけりせとてなり○後撰の作
者藤原かつて八命婦也

かつと 上徳とよりかろあされみとあを略しなふ也

かつとき 聖魚本也古事雄略記に始くして王子に宮殿あつて平人の家お用う

はしきよとい記おつてなり聖魚節の形をこれとせふ也聖魚ハ水物おとて

山城國後宍郡小野卿雲か細とて色れ家の棟よかつて本とて皆あつてとて風

かせたのため也又田舎の草書おねんどうとてお物も是也

かつらめ 柱女とあり神功皇后の時れ臣の末孫也とて東照宮の時より沙代かろお

かろらば出府を貴人の婚れおは者ともきかろらつて山城國柱の里よりおとて

入諸れおを輿の先かつて大いしてお物とて色又蹴鞠の場は用おるゆゑとて

かつらや新林もあおくはたらき一軒のあつてとて細女命の故吏もて
目勝はあふらゆるる職人可合異かれ圖とて八頭とて色とて高く纏揚たる畏
影の女館と賣の作也館ハ新謂かつてちり也

かつてん 愚昧記に任色月台とありつてさう日記に五十四首小十八首おつて

もつてく又二十首おつて何れくもく首お忘らひくとて若園集に定春

朝臣のともとて息次をよらつてはるは息次とて麻呂妻の冠かどお付侍るとて

はるは双依と文勸もあ時台息の道とてつてふ息とかけも也

かつかろ 八和小学上人の言小物とてふかろらつて何とてあ嗜好とてくはるもよ

しとてむ朱子常小嗜好の二字とて愛せとていげ小物のかろらつてあもあはたせら

とてあもあはたせらとてかろらつて何とてあ嗜好とてくはるもよ

かづけとの 琵琶行に纏頭とより被物れ我也下字集小纏頭ハ遊伎之賄賂

也とて之なり○永久れハ政官符とて下諸人不可纏頭事とて之なりハ頭と色

むとのふるあつて○かづけ綿新ハ帳ふらつて源氏に綿あつてとてとて内

務寮より奉る内侍あつて東階の上ふとて持むとて歌頭以下舞臺以上

よたまふとのり

かつらゆ 鬘本綿也延喜齋宮寮式云云の次ハ鬘とをかくる之たりこれハ
本綿りく鬘ともふあま〜薩戒記鎮魂祭の條云と云たり奥寂抄ハ
神樂をふしハまゝ本のあつらひく頭と結也額より後ハ引通を以とらる中や
ふとらる之たり今後樂ハ其の形ハ金襴をどく額とやハハは風を〜とらる
あつらきれかき 葛城社神也亦多くよまハ一宮生れ神とまらる

△かて 糧と云日本紀上稟と云らりかてハ略也かてハかまひて也とひらり
萬葉集ふかてと云ふ〜と云ふとハかまひハか〜と云ふとハ直酒直を
とらふこれ如〜○琉球云々良と云ふと云ふは知らり此ハか何なる〜
かて 萬葉集ふ難と云らり之かてと云ふと云ふはたげて也消かて得かて
寢かて往かて歸かてと云ふ皆同〜○万葉集ふ勝字と云ふは今集と云
をれたまればかてと云ふと云ふと云ふハ万葉集ふ終と云ふと宿不勝と云
ハ終らぬ意云々ハ同云也不知と云らる不飽と云ふと云ふの例也と云
かて云 日本紀ふ交字文送ふ雜字様字と云らり万葉集ふ驚酢ふ〜と云

かてと云て古字と云らり傳ふかてと云ふと云ふ是也
かてら 日本紀上歸寧と云と云ふ〜と云ふは長田と云と云ら
と云ふ万葉集上心邊の御井と云と云て吾妹が形見と云らと云ひ今集ふみか
てら好志集ふ〜と云と云らと云と云ら皆兼〜と云は意今集傳と云
かてと云ら 古事記ふ根地と云領地と云云
△かど 門と云ハ金門の取也門ハ欽と云〜と云ふハ万葉集ふと金門と云ハ
金門と云ら今倍門外と云と云と門と云らと云は倍と云〜○万葉集ふと加
かと田かと云之たり○物の角と云と云ら万葉集ふ鏡大刀之加度打放と云
と云藤と云むと云成也○才と云ハ日本紀と云〜と云ら〜と云ら〜と云ら
〜是也○魚の如と云ハ〜の角と云〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜と云ら
〜と云ら〜と云ら西と云ら〜ハ高麗と云〜と云ら〜と云ら正月け祝儀ハ用と云
四季
物語と云〜と云青魚の類也と云ら

かたり 日本紀倭名波小練と云らり堅織の波か〜たたらと云と云らと云
是也○一段と云ら〜と云西と云ら〜ハ羅一練布一練と云らり○縵と云らり縵頭巾

義解小變無文繪也と云○下徳の香取社なりと撰取乃義也神代紀小
之たり又近江伊勢と云ふ加らうけ浦なり

かどふ 新撰字續小該と云り折曲也と云たり後撰正成小句引也と云
る今人成句引を云ひかどらうを云ふ是也略之と云ふも同し後撰集に山風乃
死れ香かどらうと云ふ八草莊の詩小句引花枝共凭牆と云ふ意あり○
東に該よかみつけの馬かどらうと云りなり

かどまつ 正月門と云ふ松竹など多し後子と門松と林せり門神の祀あり
徒然草に大踏小松まゝと云ふ之たり全断無制我邦正月の事小松柏挿門
乃取長春之好と云り為尹可也

今抄にまゝと都のまゝと云り之を千色に始りて今月門松歳華紀鹿小元月松
標高戸と云ふ董勳問禮小繫松枝干戸と云ふ風俗記に正月且建以上松柏挿と
云ふ其意近し今福閨の間正月門戸小松竹と飾之云ふ八國姓爺と云
始りて西門氏の書ふ之たり○禁中并小堂上ハ門松と云ふ之なり
諸家中小ほ連と云ひくみなり

かどづま 神系乎と云り其系乎

台門のふもあはるくはやく一敷づまんと云ふ像あり

かどくく 妙法はあはるくはやく威稜はまも也源氏抄に日本紀を引て
木字と奉と云ふは唯かどくくなり

かどはたさ 看督長と云り職原抄に之ゆ檢非違使に別當に附屬する
者なり○今神社に閻神と云ふ弓箭と帯せる像を設け後天
と云ふかどはたさなり

かどりけきぬ 縁の衣也生衣と云ふと云り又水色に云ふ也とも云り新子載集に
まかあかどりけきぬの白かどらうと云ふと云り之れ袖か○免掲と云ふ
つゝ鬼毛と云ふ織子を云ふ也○あひいと云ふ時小は香れと云ふ一重に衣を
云ふ八香取の義也○糞臭と云ふ小糞摩成陰干と云ふ成かどらうと云ふと
云ふかどらうと云ふ取除く意也

倭訓栞前編六上終

作言集卷之六

十九

Handwritten text in vertical columns, enclosed in a rectangular border. The text is faint and difficult to read, appearing to be a collection of sayings or a list of items.

程原印

